

劉弢『難爲情』に見る「考X」言説

—「實現されない私」というトポス—

高 屋 亞 希

1 はじめに

近年、中國では大學院や各種資格試験など、受験が一つの社會的ブームとなっており、「考X」と總稱されている。例えば2005年度大學院入試には全國で100万人以上が殺到し、大學入試に勝るとも劣らない受験競争の様相を呈している。無論そこには、近年の大學生の就職難という現實を前に、より高い學歷、及びより多くの専門知識・技能を身につけることによって、自己の労働商品としての競争力を高めよう、という選擇意識が働いているのは想像に難くない。

しかしその一方で、MBAなどのようにかつては高収入をもたらした學歷が今日ではさほど稀有なものとはされない現状や、頻發するカンニングや試験問題の漏洩、證書の偽造が象徴するように、受験を通じて亂發される學歷や資格はインフレ状態に陥りつつある、と言って差し支えない。従って現状の受験競争は依然として熾烈ではあるものの、もはや他人との差異を圖る社會的機能は次第に薄れてきていると言えるだろう。こうした現状について、『21世紀中國文化地圖』記載の「考X」の解説は、「在校生か在職者かを問わず、例外なく受験ブームの渦に巻き込まれて」おり、「もはや何を受験するかではなく、“受験”そのものが目的となっているようだ」と、突き放した評價を下している¹⁾。このように、受験ブームという社會的狂騒が對象化される一方、今なおブームそのものは加熱を續けている現在、受験者はこの狂騒をどのように認識し、且つそこに己が参加するいかなる意義を見出しているのだろうか？

本稿ではその一端を探るべく、劉弢の長篇青春小説『難爲情』²⁾を取り上げる。小説は上海の高校2年に在籍する方思哲が、受験や戀愛の挫折、親友との別離など、學生生活の中で體驗するささやかな奮闘と失意を織り交ぜながら、大學2年生へと至る約4年間を描いている。成績優秀で聰明ではあるが、まだ

明確な人生の目的を持たない普通の若者が、不透明な自分の将来を見据えながら、大學受験など各種の試験とどのように関わっているのか、或いは関わらされているのか、と言った諸點を中心に分析してみたい。

受験ブームを支えているのは、必ずしも小説中に描かれるような十代の若者に限らないが、これから社會の中で自分のポジションを探そうとする彼らにおいて、最も集約的にこの現象が現れるであろうことは否めない。もとよりこの小説一篇をもって、社會状況を普遍的かつ網羅的に語れるわけではないが、本稿は受験ブームを支えるメンタリティーについて素描を試みたいと思う。

2 競争という名のキャンブル

小説冒頭近く、校内辨論大會の開催を當日になって初めて知らされ、クラスでは誰を代表として送りこむかでもめる。擔任ですら大會が寢耳に水のことであったのは、學年主任が自分のクラスの學生を優勝させたいがために、他クラスに準備をさせないよう、わざと當日になってから連絡してきたからである。主人公の方思哲がこの議論の場にはいないのは、擔任が日頃、早朝自習時に少し顔を見せただけですぐ出ていくことから、級長の張家崎が密告でもない限り、自習と1時間目の授業の間に教室にもぐりこめば、自習をさぼったのはバレないだろうと計算し、暇つぶしをしていたためである。級長の張家崎が教師の期待に沿って行動する眞面目な“善玉役”（p3）であるのと對照的に、思哲はそうした融通のきかない優等生タイプの學生ではないことが見て取れよう。遅れて教室に入った思哲は、クラス代表に選ばれたことを擔任から告げられて狼狽するが、遅刻の弱みを握られ引き受けざるを得ない。

実際に壇上に登った思哲は、即興で優勝候補の學生を揶揄して會場の受けをとりつつ、奇抜な論理を堂々と展開してみせる。辨論を終えて教室に戻ると、思哲の思いがけない活躍でクラスは興奮に包まれている。

クラスメートたちが騒ぎ出した。思哲に向かって身振り手振りで冷やかしからかい、喧しく騒ぎたて笑いさざめいている者ばかりだった。若いクラス擔任も刷新した眼差しで目を細めて笑いながら彼を見た。“うちのクラスから有能な人材が出るとは思いもよらなかったわ。クラスの名譽を十

分稼いできてくれたもの。”(p7)

準備萬端で臨んだ學年主任のクラスが自分たちにどれだけ差をつけても不思議ではない状況下で、思哲の辨論は想像以上の成果であり、興奮するクラスメートたちの心情は大いに理解できよう。臨機應變に論を組み立てる思哲の言語能力は、恐らくこの時初めてクラスで見出され、認證されたと思われる。というのも“刷新”という表現から、それまでの思哲に對する擔任の評價がさほど高くなかったことが伺えるし、またこのすぐ後、この能力を買った擔任が思哲をクラスの宣傳委員に推舉する場面が続くことから、思哲がこの方面の能力を元から注目されていたわけではないのが分かる。もっともこの思いがけない思哲の才能が、全ての聴衆から手放して賞賛されたわけではない。職員室から戻ってきた級長の張家崎は、學年主任のクラス代表が一等で、思哲は二等との結果を知らせる。

張家崎は職員室から戻ってくるとすぐ、些か他人の災難を見て喜ぶように冷笑した。“思哲君の演説はもちろん奇抜だったけれど、全體にちょっと正しくない論じ方があったよ。審査員が言わんとする意味は、‘自分を愛する’という〔思哲の〕着想は優れていないってことだね。”(p7)

張家崎の冷ややかな批評は、優等生である自分ではなく、他人が才能を注目されていることへの反感かもしれず、どれほど客觀性があるかについては判断がつかない。だが注意すべきなのは、思哲の辨論を評價するポイントがその立論を新鮮だと肯定するか、“奇抜”だと退けるかにかかっていることを突いている点である。張家崎が否定的評價を述べた後、別のクラスメートが擁護に回るが、その擁護も辨論への全面的な賛同ではなく、新味があったことへの評價であることを考え合わせると、その立論は奇抜でインパクトがあったものの、かなり強引な論理展開であった可能性が高い。もしこれが準備萬端で臨んでの結果であったとするならば、ここまで思哲の辨論がクラスに評價され興奮をもたらしたかは些か疑問であろう。とりあえずは、思哲が競争を通じて能力を誇示する際に、正攻法ではなく奇抜さによって、相手の評價を引き出そうとする

傾向があることを確認しておけばよい。思哲のこうした傾向は別の機会でも繰り返される。

辨論大會の数日後、學年主任の授業に遅刻して職員室に呼ばれた思哲は、思いがけず自分が市の作文コンクールに入賞したニュースを耳にする。“自分のあの古今を論じ、格調華やかな文章が意外にも専門家の慧眼を騙せたのだ”（p19）と内心大喜びする。主任からは詳細を教えてもらえないまま引き上げた思哲は、事情通のクラスメートから二等であったことを知らされる。

思哲は（中略）内心“これだってずいぶんと苦勞したわけだから、一番好いのは一等賞、二等でもまずまず、三等だったら大損だな”と密かに考えていた。（中略）思哲は失望を隠しきれず、“たった二等か、どうやらこのいわゆる専門家審査グループのレベルはたいしたことないみたいだな”と言った。（p20）

思哲自身の要約から、彼の作文が古今の用例を数多く引き合いに出し、且つ凝ったレトリックを駆使した文章であつたらしいことが伺える。この後、國語教師が思哲の入賞について觸れ、“新しい思潮の文章を現す文才というものが必要かもしれない”（p21）コンクールとは異なり、大學受験の作文ではこうした“冒険は許されない”（p21）と釘を指していることから、ここでも思哲が奇抜さによって審査員の評価を引き出そうとしたのは明らかである³⁾。興味深いのは思哲自身、そうした自分の態度を審査員の目を“騙す”と意識している点である。無論、入賞は思哲に備わっている才能と、彼なりに拂った努力の賜であることは疑いない。だが重要なのは、競争による能力の認證に際して、審査委員によって評価が眞二つに分かれるような“冒険”、言わば運に身を任せるギャンブラーのような態度が、思哲によって意識的に選擇されていることである。

例えば教師が要求する明示的な基準に従って、それを他人よりいち早く正確に消化することで認證を得るのが優等生的な競争への態度だとすれば、思哲にとっての競争とはあくまでも運によって利益を掠め取ろうとするギャンブルだと言えよう。そうした意識において、そこで拂われた努力、及び才能は運試し

をするための元手に過ぎない。こうしたギャンブラー的な意識で注意すべき點は、たとえ競争で敗者になったとしても、主觀的にはそれが自分の才能や努力に對する認證に直結していない、ということである。それは單に“たいしたことない”審査員に当たった不運によるものなのであり、その視界からは目の前に存在する現實の他者との競争が消えてしまう。

ともあれ思哲はこの二つの競争を通じて、いわゆる優等生ではないが“まさに人材ではある”(p43)との學内での評價を運良く手にすることになる。

3 競争という現實の浮上

幸運はたて續けに訪れる。思哲の物理コンクール決勝戦進出が決まるや、教育成果の提出を上から迫られていた學校側はその事例として、文理兩方のコンクール入賞を果たした思哲に白羽の矢をたてる。ただちに學内放送でも模範例として思哲のことが全校生徒に知らされ、ひいては下級生からサインを求められた思哲は己の“虛榮心”(p50)を満足させる。無論、思哲に一定の才能が備わり、且つ努力していることも事實であろうが、それがここまで持ち上げられたのは偏に學校側の事情と言ってよいだろう。小説はこうした事情についても詳細に記しており、思哲の“虛榮心”を支える裏側の事實が明かされていると考えられよう。

既に決勝戦で受賞したかのように“絶好の氣分”(p54)の思哲は、内心いけ好かない優等生の張家崎に對しても、この時ばかりは鷹揚に振る舞い、そう振る舞える“自己像を大きく感じ”(p54)るのである。

“(前略)この度は物理コンクール決勝戦出場おめでとう。”思哲はただ腹の中で盗み笑いしただけだった。張家崎の内心はきっと五味の瓶をひっくり返したように違いない。こうは言っているが、實際は無理しているのだろうと考えた。思哲は慎重に阿Q式の口ぶりで慰めた。“たいしたことないよ。もし君が一回戦に参加していたら、やはり決勝に出場できたと思うよ。”言ってしまうから自分でも意味が通っていないと思った。なぜなら〔物理の〕陳先生は一回戦への唯一の出場枠を自分に残してくれたのだから。(p54)

張家崎からの祝福の言葉を思哲は素直に受け取っておらず、そこに張家崎の内心の屈辱的な辛さを讀みこんでいる。つまり思哲は、いつもは自分より優位にある張家崎が、今回の初戦突破などによって二人の位置が逆轉したと認識し、この認識に基づいて張家崎の辛さを推測しているのである。立て續けに才能が認證される機會を得て、校内で“大才子”（p51）との評價を確立した思哲だが、それによって彼が實際に手にした利益とは、こうした高校という集團内部における優位性であり、その優位性を劣位にある者に對して實際に行使して尊大に振る舞う權利、と言えるかもしれない。

しかしここで思哲が考える地位の逆轉も、實は彼の主觀に止まるものと思われる。というのも、小説には思哲が推測するような張家崎の鬱屈した心情は一切書き込まれておらず、“自分はコンクール向きではなく、自分でもよく心得ている”（p54）と語る張家崎は、あくまでも優等生らしい“まじめな”（p54）な態度で、“謹嚴さ”（p54）に缺ける思哲も決してコンクール向きではないという忠告を言いかけて、引っ込めているからである。思哲と立場が逆轉したなどと張家崎が考えていないのは勿論、思哲の浮かれている氣分に水をさすのを控えて口を噤む態度からは、寧ろ張家崎の方が思哲の心情を見透かしていることが伺える。

思哲の主觀的な優位性がせいぜい校内でしか通用しないことは、現實の競争相手に前にした途端すぐに露呈する。名門の光復大學で行われた決勝戦事前の講習會で、各校からの参加者が一堂に會した際、思哲は隣席の學生の自分を値踏みするような視線に出會う。

輕蔑されないよう見榮を張るために、（思哲も）思い切って光復大學を嘲笑してみせると、そいつはすぐ、英雄は似たことを考えるとばかりの表情を浮かべた。（中略）思哲はそいつの校章をちらっと見た。光復付屬高校といったら自分の高校より一段どころではなくランクが高い。こうした人物ですら書物に價值を認めていないというのに、自分は（参考書をたくさん入れた）鞆など持ってきて恥さらしだ。思哲はこの時ようやく、空のかなたにも空があり、人の向こうにも人がいることを悟った。穴があった

ら入りたいほど恥ずかしかった。(p56~57)

たかが見知らぬ學生同士が虚勢を張り合っているに過ぎないが、コンクールという競争によって優劣が分けられ、自分がその敗者になるかも知れないという現実が、思哲の眼前に不意に迫ってくる瞬間でもあるだろう。だがそうした現実と思哲が向き合うのは一瞬に過ぎない。思哲は講習會の後、偶然に出會った中學時代のクラスメートが全國化學コンクールに優勝して、既に一足先に光復大學に推薦で入學していたことを知る。“一旦コンクールで受賞して推薦入學が決まれば、大學入試の苦しみからも解放されるよ。”(p61)と、この元クラスメートに激勵される以前から、思哲もコンクール優勝と推薦入學の結びつきを知っていた可能性は否定できない⁴⁾。しかしこれまで、決勝戦進出で浮かれて膨らんだ彼の想像がせいぜい表彰式で止まっていたことを考えると、この結びつきは強く意識されておらず、この元クラスメートによってようやく、コンクールが自分にもたらす優位性がどのようなものか、その具體像が見えてきたものと考えてよいだろう。

數日後この元クラスメートは再度、受賞して推薦入學が決まれば受験の苦勞が省ける上に、一旦名門大學に入學すれば高収入の一流企業への就職は安泰であるから、コンクールというのは賢い選擇だと力説する。これは、コンクールという競争で勝者になりさえすれば、後は余計な苦勞や努力なしで大きな儲けが期待できる、と言っているに等しいだろう。思哲は“内心むずむず”(p70)する思いでこの話を聞いており、是非手に入れたい、そして手に入れる可能性のある自身の未來像として受け止めていたことが伺える。この時點で思哲にとっての物理コンクールとは恐らく、單に在籍する高校内での優位という目先の利益を保證するだけでなく、次のステップにおいてより大きい儲け、優位性を稼ぐための“元手”(p71)を得る手段として、認識されていたに違いない。

だが大きな期待を抱き、参考書で必死に勉強して臨んだコンクールは、あえなく惨敗に終わる。コンクールで同じく惨敗した蜘蛛という渾名の學生は思哲に恨み言をぶちまける。

蜘蛛は憤慨して言った。“全部ウチの親父とお袋の腕前がないせいだ。

頼んだあの家庭教師二人ときたら無駄飯ばかり食いやがって、教えたことときたら全く使い道なぞなかったじゃないか。（中略）ほら、あの間抜け野郎を見てしろよ。”蜘蛛は近くで満面笑みをたたえている受験生を指さした。“あいつの家庭教師は以前コンクール問題の出題チェックの仕事をしていたことがあるんだ。（中略）今回だって試験問題ですら全部当たったんだけ。もしこんな教師を頼んでいたら、たとえ豚みたいな馬鹿でもコンクールの天才になれるんだからな。（後略）”（p80）

惨敗という結果に終わった原因として、蜘蛛の意識は自分の實力不足という点には全く向かっておらず、専ら家庭教師の能力不足と、その程度の家庭教師しか頼めなかった両親の力量不足へと向けられている。自分より遙かに才能がない者も、優秀な家庭教師がつきさえすれば競争の勝者として、自分より優位に立っているとの認識は、このコンクールによる能力の認証機能、及びその結果を蜘蛛が認めていないことを意味していよう。しかしコンクールそのものは公正な競争であり、たとえ蜘蛛が主張するような意味での不公平があったとしても、蜘蛛自身も二人もの家庭教師を雇って個別レッスンを受けていた事実を考えれば、その不公平な手段そのものが否定されているわけでないのは明らかである。不公平だと考えられているのは、優秀な家庭教師に当たったのが自分ではない別の人間であった、という点に過ぎない。それはまさしく単に運の問題なのである。運の問題である以上、不運が予め定まっているのであれば、不運による結果は自分の努力によって變えうるものではないし、また運を知らずに拂ったこれまでの努力には全く何の意味もなかった、ということになるだろう。

思哲の認識も蜘蛛と實に似通っている。蜘蛛の話を聞いた思哲は、“受賞するしないの必然性は絶対的なものであり、受ける前から決まっていた”（p81）以上、自分の懸命の努力も所詮は盲滅法に突進していたに過ぎず、ただ“他人の優秀さを引き立てる”（p81）ためにやったようなものだ、と憤慨している。競争で敗者となった精神的苦痛は手元に残されるものの、思哲の意識は専ら運によって全てが予め決定されていたことへと向けられ、その運命を知らないまま茶番を演じさせられたことへの憤慨という形をとっている。無論こうした意

識において、競争による能力の認証機能は全く認められておらず、自分の努力を超越した運に身を任せるというギャンブラー的な意識が、ここでも結果的に繰り返されている。とはいえ、名門大學への推薦という大儲けのチャンスが潰れただけで、高校内で思哲への評価が極端に下がったわけではない以上、コンクールでの惨敗も元手を失ったとは言えないだろう。

思哲も高校3年生となり、大學入試が目前に迫る。大學入試は高校卒業後に自分がいかに優位なポジションに配分されるかという、言わば今後のギャンブルの元手に關わる競争に他ならない。思哲も地道に受験勉強に明け暮れる。いよいよ迎えた入試本番で、思哲は試験成績こそ満足のいく高得点であったものの、全体の平均点も高かったため、第一志望の光復大學合格は覺束なくなってくる。萬一どこも不合格ということになれば、大いに面目を失うことになると思哲は思い悩む。果たして第一志望の光復大學は數點差で不合格。第二志望の江苑大學から何とか合格通知を貰い、大學に入りさえすれば“天下の寵兒”(p135) と言えるだろうとほっとする。この時點で、思哲の意識は第二志望に合格した安堵感に包まれており、第一志望が不合格であったことは痛みとして全く意識されていない。不合格が敗北と意識されない理由の一つとして、例年であれば問題なく合格ラインの高得点であったこと、志望校を決めたのが自分ではなく両親であることから、不合格は己の責任範囲ではないと思哲が考えていることが関係しているだろう。ここでも自分を超越した運が支配している以上、自分はそれを如何ともし難く身を任せるしかない、という意識が見え隠れしている。だが大學入試という競争において完全な敗者ではないが、勝者でもないという手痛い現實が、思哲に付きつきられる瞬間が訪れる。

卒業證書を取りにいった高校の職員室で、名門の光復大學合格を決め、周囲から羨望をこめて祝福されている張家崎と出くわす⁵⁾。連絡先と進學先を書いてくれとノートを渡された思哲は、張家崎に頑として進學先を教えようとはしない。元よりいけ好かない、自分より必ずしも才能が備わっているとは思えない張家崎が、この大學入試という競争を通じて、自分より優位なポジションを確保した現實を前に、思哲が劣等感を抱かされたことは想像に難くない。高校時代に培った“大才人”という評價は、大學入試によっては全く認証されないまま、肥大化した自意識だけが残される。それこそが、高校時代のギャンブル

の收支決算で、思哲が最終的に手にしたものと言えるかもしれない。

4 認証されない「眞實の私」

江苑大學での新生活を始めた思哲は思いがけなく、物理コンクールで同じく惨敗を喫した蜘蛛と再會する。“ひたすら試験に追われた挙げ句の果てが、他人のために花嫁衣装を作っていたとは。デタラメだ！”（p153）という蜘蛛の憤慨からは、大學受験においても自分がまた譯も分からぬまま定まった不運の中で茶番を演じさせられ、そこで拂った努力が他人を引き立てる“花嫁衣装”に過ぎなかった、というこれまでと同様の認識が伺える。失敗を経て世の中の中からくりを“見破った”（p153）と續ける蜘蛛の憤りが興味深いのは、その個人的な挫折に由來する不満が、廣く同時代の社會全般の風潮と関連付けて認識されているからである。

“今時何人の教授がすすんで馬鹿正直に學問をしてるんだよ。北京大學の例の博士課程指導教授の事件は、お前だってひょっとしたら聞いているかもな。このご時世、肩書きを手に入れて賞金をいただくためには、論文だって剽竊改竄できるんだから、嘘をでっちあげて何がいけない、札束だけが眞實ってわけさ。これは文人だって内心一番知っていることなんだよ。能力のある者はとくに象牙の塔を出て商賣しているし、少し保守的な奴は達者な口先で小金を稼いでいるよ。（中略）以前は俺たちも馬鹿正直にまだ何か學問しようと思っていたけど、本當に幼稚だったな。（大學では）學生會に入ってちょっとした官職でもせしめた方がましさ。（p155）

目先の利益を稼ぐために嘘を弄して儲けている、という昨今の學術腐敗の風潮に對する蜘蛛の認識の當否はともかく、注意すべきなのは蜘蛛がそうした社會風潮を批判しているわけではないということである。立派な肩書きを得るために、まじめに努力を積んでも必ずしも利益をもたらすとは限らない。その一方で例えば物理コンクールの講習會で講師をつとめた老教授など、中身は大したことのない者が、その肩書きだけで自分を含む無知な者を騙し、講習料と稱してそこから利益を“搾取”（p155）できる現實がある以上、立派そうな肩書

き、即ち學生會の役職を手に入れて元手にする方が、以後のギャンブルでより確實に自分に利益をもたらす筈だ、という結論を蜘蛛は導き出す。それは言わば、ギャンブルによって人生を設計することへの、全面的な開き直りを意味しよう。

蜘蛛は學生會に入ることは學生の間で“頭角を現せる”(p155)し、將來役人になるための経験、即ち元手としても役立つという見解を披露する。それを聞いた思哲も役人になる気はないものの、學生會の役職には興味を示し、文藝部の面接を受けることにする。面接では蜘蛛のアドバイス通り、高校時代やったこともない肩書きや成果を並べたところ、ギャンブルは見事にあたり、新入生としては破格の文藝部副部長職を手にする。初めての學生會の會合が終わった後の敘述では、思哲の得意満面な様子が些か揶揄をこめて描かれている。

多くの學生會の管轄下にある各大サークルの責任者も、思哲に會うと親しげに應對しないものはなかった。思哲はあたかも地方官として赴任した地方有力者のようで、各所どこでも賄賂を用意しており、思哲は自分がひとかどの人物であるかのように感じた。人格も何倍か威厳が加わり、話す時も知らないうちに役人調を帯びた。(p170)

副部長の肩書きが早速、思哲に大學という集團内部における優位性を與えたことが分かる。小説では明確な記述がないので推測になるが、恐らく何らかの便宜を圖ってもらうため、或いは無用な干渉を招かないため、新任副部長の思哲に取り入ろうと近づいてくる者が大勢いる。それに對して思哲が役人のように原則を持ち出して、軽くないような場面を想像してよいだろう。周圍から優位にある人物として扱われた思哲は、そうした他者の反應をすぐさま“ひとかどの人物”という自己像として組織化する。周圍が差し出した鏡に映るこのような自己像こそ、思哲が望んでいたものと言えるだろう。だがこの時点での思哲は實のところ、肩書き以外に何の権限も持たない新入生に過ぎない。

具體的権限を與えられることによって、思哲の優位性は一層現實化される。この初めての會合時、長年放置されて荒れていたダンスホールの管理運営を任せられ、思哲は事情が分からぬまま引き受ける。文藝部長は面倒な仕事を引き受

けたことに困惑するが、既に公の場で思哲が承諾した以上、仕方なく文藝部をあけて管理運営の準備にとりかかる。思哲が中心になって清掃に奮闘した結果、ホールは見違えるほど綺麗になり、週末営業するまでにこぎつけた途端、平日にサークルなどのパーティーに使いたいと、思哲にホールの使用許可を求める者が續々と訪れるようになる。校内のダンスホールの使用を許可する権限など、客觀的に見れば大したものとは言えないだろう。しかし、そのささやかな権限を持つが故に、伺いをたてに来る者は皆、思哲に對して鄭重な姿勢をとらざるを得ない。これを思哲による私權亂用と批判する向きもないわけではないが、周圍が率先して思哲に親しげに近づいてくる状況にさほど變わりない。

だが運良く手に入れた優位性が、脆弱な裏打ちしかないことはすぐに露呈する。比較的友好な關係にある4年の宣傳部長が思哲に忠告する。

學生會で人に抜きんでたいのだったら、早いうちに渉外部に行きな。文藝部にも前途なんかないから。（中略）我が校歴代の學生會主席だって8、9割かた渉外部から出ているんだよ。それにこの部は交際範圍が廣いから、校外、それに企業や事業體なんかとも付き合いがあるのさ。僕は幹部をやっている學生だけど、奴らは學生をやっている幹部なんだよ。（中略）渉外部が前回、お前にダンスホールを借りたいと言ってきた時に、なんで承諾しなかったんだよ？（中略）馬鹿だな。奴らこそが學校當局なんだぜ。そんなことも分からないで、後からおべっか使いになろうたって、もう間に合わないんだぞ。お前なあ、貸さなきゃいけない奴には貸さないで、貸しちゃいけない奴に山ほど貸しちゃうんだからな。”（p189）

この忠告を聞いて間もなく渉外部長が思哲の元を訪れ、もっともな理由を並べて、今後ダンスホールは渉外部が運営管理しようと持ちかけてくる。先に渉外部がホールの使用許可を求めた際、政治的配慮のない思哲が不許可を出したことが、學生部で最優位にある渉外部に對して私的權限を亂用したと受け取られ、この召し上げに繋がったことが状況から推測できよう。だが思哲には“大權を失った失意”（p190）はあるものの、自分より優位にある渉外部長に對して、ホール管理の權限は自分たちにあると主張するだけの根據も見つけられず、

それどころか己の“不快感”(p190)を言語化することすらできなかったことが敘述で明かされている。読者にとっては明白な召し上げの原因も、この時の思哲にはあまり理解できていなかった可能性が高い。思哲には自分の不注意が招いたミスというより、單に極めて不運な災難として認識されていたことだろう。

失意は續けてやってくる。4年の部長が引退した後は副部長の自分が晴れて部長になれる、と内心期待していた思哲はあえなく學生會の役員改選で落選してしまう。読者にとってはこの事態も容易に予想がついていたことである。というのもこれ以前、役員改選が近いにも関わらず、學生會にあまり顔を出さない思哲に、“もっと交際してこなきゃダメだぞ”(p214)などと宣傳部長が個人的に忠告しているからである。また敘述も思哲が與えられた目の前の仕事には奮闘するが、日頃から學生會の他のメンバーと交流につとめ、“定額以外の余分な感情の投資”(p226)するのを忘れており、その方面で落後していたことを記している⁶⁾。だが宣傳部長からの忠告にも関わらず、興味がないと注意を拂わぬまま、この落選という事態を迎えた思哲にとっては、まさに晴天の霹靂のような不運だったと言えるかも知れない。こうしたやや不自然な設定から、世間のルールに無知であるが故に、無意味な奮闘ばかりする青年として、思哲を描こうとする敘述のスタンスが伺える。予め定まった不運を知らずに茶番を演じさせられた、という思哲や蜘蛛の認識は敘述によっても共有されていると言える⁷⁾。

落選によって副部長という肩書きだけが思哲に残されるが、そもそもこれは江苑大學内部にしか通用しない優位性である。更に落選の失意がまだ消え去らぬうちに、光復大學學生會との交流會で思哲は新任の文藝部長からお茶の接待役を言いつけられる。光復大學からの主賓は1年生ながら學生會副主席のエリートとのことであったが、驚いたことにそれは高校時代のクラスメートで、いけ好かない級長の張家崎であった。

高校時代は少年志を遂げて英氣満ち満ちており、どうして張家崎などに落後することがあったのだろうか。だがたった一年の短い間にかくのごとく落ちぶれてしまった。例えば今は張家崎に近づき膝を交えて話したいと思っ

ても不可能だ。張家崎の周りにはウチの學生會のお偉いさんが取り巻いていて、自分の序列などお呼びではない。茶を持って注ぐ以外、話す余地なんか回ってこない。（p234）

才能において張家崎に決して劣っていない、という“大才子”と渾名された高校時代の認證に思哲がいまだにしがみついていることが伺える。兩者の間に差をつけたのは大學入試や學生會役員選舉など幾つかの競争による認證であるが、これまで見てきた通り、思哲の意識ではその認證結果は才能や努力の不足を示すものではなく、自分に有利な認證が行われなかった不運によるものである。實際、小説には思哲の“この世を嘆き、身分の高低とは何なのか”（p234）などと序列へ反發する意識が書かれているが、序列をもたらししたものへの意識は一切書き込まれていない。思哲はここでも己の不運を恨むしか爲す術がないと思われる。

せめて張家崎の前で二人の差を明らかにされたくないという思哲の願いも空しく、新任部長からお茶の接待を促された思哲は、公の面前で新任部長に惡態をついてしまう。無論その行爲によって、張家崎に對しては一面目を保ったかも知れないが、學生會で立場を悪くするのは誰の目にも明らかである。ここに至って思哲は、學生會で“頭角を現す”ことに完全に失敗したと言えるだろう。學生會で挫折したのは思哲ばかりではない。戀愛沙汰で學生會から足が遠のき、そのことで立場を悪くしていた蜘蛛も、自分より才能があるとも思えないかつてのクラスメートたちとこの交流會で對面し、今日の逆轉した序列を白日の下に曝されるのを嫌い、既に學生會に辭表を出していたのである。思哲と蜘蛛はまたもや共に競争というギャンブルに負けを喫したのである。

次に運試しをするギャンブルとして、蜘蛛の目は新たな競争に向けられる。

“出國だな。”彼の瞳には一筋、消滅したものが再燃したような切望が現れていた。“もう考えたんだ。學校で GPA を稼ぐ。英語の基礎がまだ疎かになっていないうちに、TOEFL や GRE を受けて出ていくよ。このゴタゴタを離れて、外の世界で眞實の自分を探す。”（p239）

これまでの幾たびかのギャンプルによっては、ついに認証されることが叶わなかった“眞實の私”が、蜘蛛自身にとってもいまだ具體的にどういふものか見當がつかず、これから探すものとして意識されているのが興味深い。どこかに存在する、しかし今ここには存在しない“眞實の私”というのは即ち、自分が“頭角を現す”ことができる場に他ならないだろう⁸⁾。だがそうである以上、そこに他者との競争は避けられないし、競争で敗者になる可能性も否定はできない。そして競争での大小の失敗から何かしら教訓や反省をくみ取ることがなければ、その場に踏みとどまり更なる努力を重ねることもあり得ない。蜘蛛が手にいれたいと切望するものは、どこかに存在していそうできて、實はどこにも存在しないものである。競争の勝者となるために拂われる努力は、挫折の度に無意味な努力であったと容易く放棄され、別の目標へと切り替えられる。蜘蛛、そして思哲が果てしない競争という名のギャンプルに身を投じ續けるしかないことが予想されてしまう。「考X」という社會現象は、例えばこうした意識によっても支えられているのである。

5 おわりに

思哲には大學生として學業という本分を貫き、數年後に控える就職競争での元手を地道に積み重ねることは初めから回避されている。大學の授業は大半が、擔當教員自身も内容に精通していないような見かけ倒しで、單位を取る際に“各自の適應能力と手段”(p214)が試されるだけの點取り“ゲーム”(p214)に過ぎず、學問をする意味がない、と親しい4年の宣傳部長が思哲に傳授する。だが簡単に卒業できるとは言っても、學歷だけでは就職の元手としては不足らしい。

この宣傳部長が就職活動で持ち歩いていた履歷書に、受賞歴や取得資格、得意分野が數多く書き連ねられているのを見た思哲は崇拜の念を抱くが、その様子を見てとった部長の方が赤面して慌てる。そして二流大學出身でコネも持たない自分にとって、學生會宣傳部長という經歷も、履歷書に書かれた優秀な人材であるとの美辭麗句も、就職という嚴しい競争の中では目にとまることすら期待できないと續ける。卒業を控えながら就職先が決まらない部長は、自分の將來にほとんど期待を持っておらず、その見方は現實的である。とは言っても、

まだ1年生で就職の厳しい現実とは無縁の思哲には、この部長の諦観は理解できない。

だが大學1年の前期が終わった冬休み、思哲と同期の友人たちも数年後の就職を睨んで、コンピュータ関連の資格試験の講習を受講しようという相談を始める。相談を受けた思哲は、その資格にはコンピュータを実際に使いこなす實力を認証する機能がほとんどないと受講に反対し、大學は確かな基礎學力を身につける場だと力説するが、日頃研鑽を積んでいるようにも見えない思哲の言葉には何の説得力もなく、友人たちは取り合わない。

あるっていうのは絶対、ないっていうのよりましなのよ。實力ってものははっきりと語れないものだけど、証明書というのは明々白々なものじゃない。今の世間の様子を見ると、数枚の認定證書がないと、卒業して就職するにも問題になるじゃないの。(p254)

資格試験という認証機能と、認証によって測られる實力や才能の乖離など、この友人には何の意味も持たないだろう。測られる實力は目に見えず、實態が掴めないものである以上、目に見える元手、即ちどれだけ認定證書を持っているかが次の就職競争での勝敗に関わる、というこの友人の見解は實のところ、偉そうな肩書きを手に入れて利益をせしめようとした思哲や蜘蛛のギャンブラー的な認識とそれほど大きな違いはない。蜘蛛がそうであったようにこの友人もギャンブルに負けた挙げ句、どこかに存在する“眞實の私”を實現すべく、新たなギャンブルに身を投じることがあるかも知れない。自分に相應しいポジションが競争によって與えられないことへの不公平感はあるとしても、競争という社會制度そのものに批判の矛先が向けられることもないし、競争での挫折が自意識に作用することもない。競争およびそれに関わる自己は對象化されないまま、この世のどこにも存在しないトポスを求めて、様々な試験に狂奔する學生たちの姿こそが、この小説に描かれる「考X」現象である。

小説は、留學を目指して英語の猛勉強に勵んでいた蜘蛛が発狂するところで終わる。蜘蛛が、そして思哲が競争を通じて闇雲に求めていた“眞實の私”というトポスは、現實のどこにも存在し得ないものであるが故に、蜘蛛は狂氣の

世界に向かわざるを得なかったと言えよう。この些か陳腐な結末を蜘蛛一人の運命としてではなく、「考X」現象に參與する小説の他の登場人物、そして社會の無数の人々の運命と重ね合わせたその瞬間のみ、この凡庸な小説が恐ろしいものに思えてくるのである。

注

- 1) 朱大可・張閔編『21世紀中國文化地圖』第2卷(廣西師範大學出版社、2004年5月)P.294参照。
- 2) 『難爲情』(作家出版社、2004年5月)。作者は1981年生まれ、上海東華大學4年に在籍する學生。近年、こうした低年齢の作家による小説が市場を席卷しているが、こうした文化現象については、稿を改めて論じてみたい。
- 3) 大學入試作文はこの近年、出題された話題に對して解答者が自由に發想したことを書かせようという傾向が明瞭である。文體・形式についても多くの場合、詩歌を除き自由とされており、且つ小説、寓言、戯曲などの形式で書いた答案に高得点が付きやすいという事情から、最も傳統のかつ一般的な論説文以外の形式で作文をする者がかなりの數に上るらしい。小説など論説文以外の形式によって書かれた答案への採點基準が甘くなる傾向に對して、黃玉峰主編『黃玉峰重批高考滿分作文』(廣西民族出版社、2004年2月)などは批判的な意見を述べている。こうした傾向を象徴した典型例として、古典白話文を驅使した小説で滿點を獲得し、社會現象までひきおこした2001年大學受験作文「赤免之死」がある。この作文を巡る社會現象への否定的見解としては、例えば陳平原「當代中國的文言與白話」(『當代中國人文觀察』人民文學出版社、2004年2月刊所收)がある。『難爲情』に登場するこの國語教師の發言も恐らくは、こうした受験作文を巡る社會的風潮を意識しての發言と考えてよいだろう。受験作文と作文コンクールとの關係については、いずれ別稿に改めて論じてみたい。
- 4) 數學、化學などの全國コンクールで優勝することによって、大學に推薦枠で入學できる制度が一部行われており、受験生の間にこの種のコンクールブームを煽る要因ともなっている。小説中ではコンクール結果が出た後、思哲の父親が優勝でなくとも、せめて入賞できれば大學受験の際に加點してもらえて有利になる、と新聞記事を示しながら思哲に話しかける場面がある。その新聞記事によれば、市レベルのコンクール受賞者は10點、市の三好學生は20點、少數民族及び香港・マカオ・臺灣同胞は5點、それぞれ加點されるとのことである。P.91参照。
- 5) 張家崎は學校の推薦によって上海市の三好學生に選ばれ、大學受験に際して20點加點されている。加點については註4)参照のこと。高校で三好學生を選ぶ際に、實際は張家崎を推薦することが内定しているにも関わらず、學校側が民主選舉の體裁を取ったことが、思哲の不公平感・無力感を招いている。勿論、學校側のこうした茶番に過ぎない選抜方法が、予め全てが運によって決められているという思哲の認識を強化してしまうのは理解できるが、それを除くと張家崎は常に學校側の期待を引き受けてきた優等生で、學校側が彼を三好學生に選ぶこと自體は全

く妥當なことであり、遅刻などを繰り返してきた思哲に張家崎が拂った努力が缺けていたのは紛れもない事實である。

- 6) 清掃や荷物運搬などの肉體勞働は、面子を失うものとして誰もやりたがらない中、政治的配慮に缺ける思哲が無鐵砲にもそうした仕事を買って出て、汗水垂らし奮闘したことが描かれている。
- 7) 「京城研討校園文學作品《難為情》」と題する2004年7月5日付『新民晚報』記事（楊麗琼）によると、在京の研究者・批評家を招いた作家協會主宰の論評會の席上、崔道怡が“作品の敘述は全て主人公の認識に沿って書かれており、文章もナルシスティックな趣きがある。”などと否定的な見解を述べている。
- 8) 競争社會においては實現されない“眞實の私”という認識は、様々な分野の言説中にも散見される。例えば自助旅行を巡る言説はその典型である。藏羚羊自助遊シリーズのガイドブックによれば、自助旅行とは意のままにならないことが多い仕事とは對比的に、己の力で困難を乗り越え、“自己を實現、及び夢を完成させる過程”であり、“全く新しい意味を有するライフスタイル、價值觀”であると定義されている。こうした仕事を通じては實現されず、自助旅行によってのみ實現される自己とは、本稿で析出した“眞實の私”と似通っているだろう。張志剛・張角著『河南河北』（中國大百科全書出版社、2004年2月）著者序、及び前言「給自助旅行者」を参照のこと。